



感謝を伝える作戦会議



呉妹地区社会福祉協議会は発災した7月から毎月欠かさず、これからの地域づくりについて協議を続けています。

感謝を届ける

あの日、助けてくれた人たちに感謝の気持ちを伝えたい

4 支え合いのチカラ

災害発生時の人命救助、避難所や仮設住宅での暮らしの支援、地域でのつながりやコミュニティの再構築等、この章では、被災地で生まれた、多様な支え合い活動とその効果について紹介します。

7月7日、水島から実家のある真備へ駆けつけてくれた兄弟の話、近所3人で協力して救助をしてくれた尾崎の人の話、その人たちが暗くなるまで何十人もの住民の命を助けてくれた話…。

7月下旬から定期的に開催される、呉妹地区社会福祉協議会の会議では、いつも水に浸かったわが家から救い出してくれた「あの人たち」のことが話題にあがります。

「助けてくれた人たちに何かの形で感謝の気持ちを伝えられないだろうか。」そんな声から作戦会議が始まりました。

みんなで協議をし、地域の声として、人命救助をしてくれた方を表彰してほしいという要望を備中県民局へ届け感謝状を贈呈してもらえることになりました。

ボート使い救助 7人に県感謝状

県は9日、西日本豪雨で被災した、7人に元頭や近所同士の助け合いで、7月7日に救助活動をしたに感謝した。救助活動をした7人は、元頭や近所同士の助け合いで、7月7日に救助活動をしたに感謝した。

伊原本知事（右）から感謝状を受ける救助者たち

直也さん（29）＝真備市真備町上万＝と弟の玄士さん（28）＝西門連島町御蔵田＝は「長腰が曲った高齢者が多く、無理に格闘できる不安もあったが、無我夢中、差水をかき分けて、口を吐き出した。助けてくれたお礼に、感謝状を贈りたい」と話した。

伊原本知事は「豪雨と行動をともにした皆さん、感謝状を贈りたい」と話した。

被災したお礼に、感謝状を贈りたい。お礼に、感謝状を贈りたい。

伊原本知事（右）から感謝状を受ける救助者たち

2015年11月7日 日経新聞朝刊 26ページ

「あのときはみんな一生懸命でちゃんとお礼が言えなかったけど、助けてくれてありがとう。」

人命救助にあたってくれた人がいること、その感謝の気持ちを忘れずに、しっかりと声とかたちにして返そうとする人と組織があることの両方が、地域の大きな財産です。



茅野 匠さん（災害支援団 Gorilla）



このカヤックと茅野さんの行動が多くの方を救助しました。（写真上）



蘭小学校で運営したゴリラカフェの様子。ゴリラのイラストは小学校の先生が描いてくれました。（写真右）

7月7日、豪雨により真備のまちが水に浸かったことを知った茅野さんは、いてもたってもいられず、すぐに自分のカヤックを車に積み、救助活動を開始しました。

茅野さんの勇気ある行動は、12人の住民の救助につながりました。

その後、茅野さんは、避難所となっていた、蘭小学校に憩いのスペースとして「ゴリラカフェ」をオープン。避難者や支援者関係なしにみんなが、ホッとできる居場所をつくりたいとの思いで、多くの人の心をあたためました。

現在も、支援物資を持参しての訪問活動や地域のなかでのカフェ運営等、ゴリラは真備のまちを今日も全力で走ります

救助活動
×
地域支援

命と暮らしと
地域を守るゴリラ



地区社協による被災の実態調査



浸水した場所をみんなで確認し、どこを通れば避難できるのかを話し合いました。

実態把握

もう二度と同じ思いはしたくない

今回の災害の被災状況を地域の人に知ってもらい、家族や近所で避難場所や避難するタイミングについて話をする機会をつくってほしいという思いを込めて、呉妹地区社会福祉協議会は独自で地域の実態調査に乗り出しました。

地区社協の役員で地域を歩き、住民の声を聞くことにより、呉妹地区は全・半壊合わせて約54%の被害があることがわかり、その結果を地元の社協だよりに掲載し地域の方に届けました。

実態調査で把握した被害状況と地域の声は、次に同じような災害が発生した際に、日頃から家庭や地域でどう備えるかという協議へと活かされています。

呉妹社協だより 臨時号
平成30年10月
呉妹地区社会福祉協議会

7月の大水害から3か月が経ちました。被災された皆様は大変な苦痛を被っておられることでしょう。
さる4月某報の「がんばろう呉妹」の号には、大勢の地域のご寄付をいただき、掲載のうちに終わることになり、本誌にありがたくございました。
その後、呉妹地区では国・県・市・町・村の災害対策委員会を立ち上げ、話し合った事項をまとめたので、お知らせします。

1 呉妹地区の被害状況（このうち、全壊・半壊・全壊等を除く）

住居の全・半壊は	全戸数の54.1%
死者…4名	
全壊…262軒	
半壊…90軒	

現在、被災された住居の2割、避難所、仮設住宅、みなし仮設住宅……等で生活されている方は、とても不安な生活を余儀なくされています。一日も早く、被災地に戻り、日々の生活が営まれることを願っています。

2 避難についての再確認
※「避難所利用指針」が示す通り、市が指定した避難場所には、早めに逃げましょう。
特に「避難指示」が出た場合は、家族はもちろん、隣近所にも呼びかけて、絶対に逃げましょう！
※避難場所（事前にその場所に行ってみましょう！）
水害（河川洪水）のときは、指定する避難所（指定された避難所）で避難してください。指定された避難所は、指定された避難所です。
土砂災害、地震のときは、指定する避難所（指定された避難所）で避難してください。指定された避難所は、指定された避難所です。
高層・高層のときは、指定する避難所（指定された避難所）で避難してください。指定された避難所は、指定された避難所です。

社協だより臨時号



エプロンばあばの復興マップ



かわいいイラストと凝縮された暮らしの情報。
今すぐにもお買い物に行きたくなります。

不思議なことに、こんなに便利で多くの人が見たことがあるこのマップ、誰が描いて貼っているのか不明なんです。分かっているのは、「エプロンばあば」という名前とマップからあふれる「ばあば」の被災地へ向けた愛情…。

これからも「エプロンばあば」の情報発信から目が離せません。



情報発信

誰が描いているの？
愛情たっぷり謎の復興マップ

真備町では、時々、とてもきれいであたたかみのある、手書きの地図が掲示されたり、配られたりしています。

平成30年12月現在、すでに発行回数は11回を数えており、地図が新しくなるたびに、再開した店舗の情報やイベント情報、暮らしのお役立ち情報が追加され、真備のまちが活気を取り戻していく様子を実感することができます。



掲示板

道路に面した個人宅のガレージ。本来は情報発信をする場ではありません。

しかし本当に地域住民の目に留まりやすいのは、そういった「通りすがり」の場所なのかもしれません。



「情報」というきっかけで人が集まり、さらに情報が深まります。



情報発信

まちで見かけた掲示板
キーワードは
「通りすがり」に目に入るところ



服部地区

住民
運営の

物資
拠点



7月8日の服部地区



服部の自主支援物資拠点

考えるより先に体が動いた

服部地区では、発災後直後の7月8日から同地区に住む西川由貴子さんと水川美千子さんが協力して物資支援を開始。
当時は発災後間もないということもあり、自家用車の荷台から支援物資を配ったとのこと。

お二人は、「こういう時だからこそ、決まった人が動くのではなく、動ける人が動くべきであると思う。考えるより先に体が動いた」と当時を振り返ります。

また、7月20日からは、物資支援の活動を継続するため、服部地区社会福祉協議会の協力のもと、同地区内の住民の方々100人以上とともに、尽力しました。



岡田分館

届くのは「もの」だけじゃない

岡田地区では、岡田分館を物資配付の拠点として、地域の方士で物資の管理や仕分け、整理を行ってきました。そこは、訪れる人にとつての再会の場でもあり、相談やおしゃべりができる場にもなっていました。
物資による生活を支える活動だけではなく、同じ不安や悲しみを共有する住民同士だからできる、気持ちを支える活動がそこにはありました。



話しながら心が癒されていきます。

衣類は選びやすいようにディスプレイしたり、姿見を置いたり、住民のアイデアによる細やかな気配りがありました。



岡田分館内の自主物資拠点の様子



二万分館

運営を担ったまちづくり推進協議会の皆さんは、交代で受付やちよつとした相談に応じ、被災者の暮らしと心に寄り添いました。

避難所となっていた二万小学校からも近く、避難所から次の生活の場に移される際にこの場所で、衣類や食器類等の生活雑貨やお米等をお渡ししました。

資の配布拠点です。

新たな暮らしを応援



地域の人からたくさんの善意と物資が寄せられました。

糸田団地



手づくりの物資拠点だからこそ、ぬくもりや安心感がそこにはあります。

手づくりだから心地よい

糸田団地町内会が団地内のお宅の駐車場を借りて開設した物資拠点です。

自宅をのぞくついでに立ち寄れる手軽さと見知った顔に会える安心感で、いつしか町内の集いの場となりました。

団地のライングループの立ち上げや忘年会の開催など団地の結束を担う一因となりました。



上有井公民館



上有井避難所お別れ会の様子、すでに退所した方も久しぶりにのそぎにきてくれました。



年末年始はクリスマス会やもちつき大会など内容が盛りだくさん。



県外から来てくれた美容師のボランティアさんがカットをしてくれました。

自主避難所

みんなで避難できて本当によかった

上有井公民館は、市の指定避難所では、ありませんでしたが、ご近所同士が声をかけ合い、被災していない上有井公民館を目指したため、コミュニティがあまりバラバラになることなく、アットホームな雰囲気でも同生活が送れたそうです。

発災直後は、地元の住民・団体からも多くの支援を受けていましたが、自主避難所として、「何もかもしてもらう支援は今後の暮らしのために良くない」と避難者同士で話し合い、調理や掃除等の役割を決めていくことにしました。

現在は避難所としての役割は終わっていますが、避難所での支え合いでさらに高まった一体感はさらに地域を活性化してくれそうです。



尾崎ひまわりサロンの同窓会



この同窓会は今後も継続して開催されることになり、その場で連絡網を作成しました。日頃からつながりのある人同士なので、連絡網完成まで10分もかかりませんでした。

集会所はまだ使用できませんでしたが、屋外でテントや机を用意して、みんなでもとても大切なひと時を過ごしました。市内各地から懐かしい顔ぶれが集まりました。発災前とほぼ同じ人数が来てくれたことが皆さん一番の喜びだったようです。

集会所はまだ使用できませんでしたが、屋外でテントや机を用意して、みんなでもとても大切なひと時を過ごしました。市内各地から懐かしい顔ぶれが集まりました。発災前とほぼ同じ人数が来てくれたことが皆さん一番の喜びだったようです。

集いの復活

ずっと待ち焦がれていた再会の日

毎月、宮田団地集会所で開催していた尾崎ひまわりサロン。発災後、団地の住民もほとんど自宅を離れて暮らしていましたが、みんなが集まって以前のようにおしゃべりや食事を楽しむ同窓会が企画されました。



これまでも、サロンの運営を支援してきた大重さん。この日のために手づくりスイーツを作ってきてくれました。



岡田小学校避難所「集いの場」 岡田仮設団地談話室サロン



サロンの様子。12月は自分だけのクリスマスリースやツリーを手づくりしました。



岡田避難所サロンではカプラを積みあげ、塔の高さを競いました。(写真左)

地元住民もサロンの応援に関わってくださり、小さな談話室は活気にあふれています。

現在、岡田仮設団地談話室で月に2回、定期的に住民が集い交流できる場となっています。

「憩いの広場」というスペースを活用し、体操やレクリエーションを行う「集いの場」を開催しました。

仮設団地での集い

集える居場所をみんなで応援

日本赤十字社岡山県支部の支援を受けながら、岡田地区での居場所づくりが進められています。

岡田小学校の避難所では、みんながくつろげる



楽しく寄合所



大将の包丁さばきと、大きなお魚に子どもたちは大興奮。



居酒屋ならではの雰囲気が会話を盛り上げます。



被災者支援を続ける松下さん夫婦。

みなし仮設の集い

広がっていく、
新しい「居場所」

発災以降、「食べ物屋」として自分たちができることを考え、被災者への支援を続けている、新倉敷駅近くにある居酒屋「楽らく」の松下さんご夫婦。

みなし仮設での生活で、寂しい思いや不安な気持ちを抱えている被災者同士が、お互いに情報交換ができる場を作りたいという思いから、子ども食堂「楽らく寄合所」を開催しています。バラバラになった人が集える場ができ、そこから生まれたつながりから、さらに支援の輪が広がります。



まびの集い in 水島

水島鶴の浦のJFEふれあい会館を会場に、みなし仮設住宅在住者の方を対象にした交流会を開催しました。

当日は水島地区の民生委員さんもたくさん参加され、自分の担当地区を紹介し「困ったことがあったら何でも言ってください」と元気づけてくれました。

「慣れない生活の場だけど、頼れる人の顔が分かることがとても心強い」と参加者も喜ばれていました。



仲良しになるきっかけづくりとしてみんなでゲームを楽しみました。つつい夢中になってしまいます。

孤独にさせないつながりづくり

まびhouseコミュニティ

「おかえり」って言ってあげたい

真備町に帰りたくても帰ることができない人たちに、居場所を提供したい。倉敷駅西ビルの「磯の家」では毎月2回、お茶会が開催されます。

ここではとにかく自分の家のようにゆつくりと過ごしてほしい、私たちはそんな方に「おかえり」って言ってあげるお手伝いをしたい。

イベントを主催するまびhouseさんは、お茶会に加えて、被災地を回りながら支援物資を届けたり、訪問活動を通じて困りごとの発見や相談・対応を行っています。



まびhouseさんが用意してくれた支援物資で、イベントホールがいっぱいになりました。



高齢者のつどい（玉島富田地区）



当日は真備町や建設型仮設住宅のある柳井原から40名の参加があり、バス3台を巡回させて、会場の富田小学校まで送迎をしました。

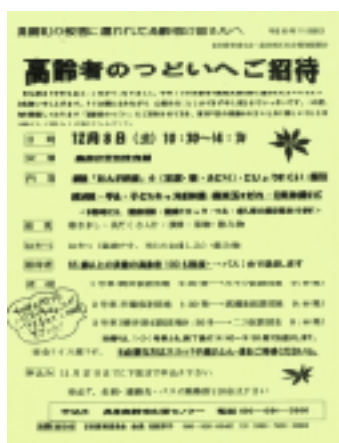
お芝居や歌、踊りを楽しみ、昼食をご一緒するなど、富田と真備に新たなつながりが生まれました。

帰る際には、みんな笑顔でお互いにいつまでも手を振っていました。

地元イベントへ招待

私たちがからでできる「手招き支援」

富田地区の愛育委員会と地区社会福祉協議会が開催する「高齢者のつどい」では、真備町の被災者にも、一緒に楽しい時間を過ごしてほしいとの思いから、イベントにご招待しました。



いつまでも笑顔で手を振る富田愛育委員会の植田会長（左）



霞橋リバーサイドグラウンドゴルフ（玉島上成緑地）



グラウンドゴルフのプレーもそのあとのおしゃべりもとても楽しい。

スポーツ交流

「一緒にやろう」
が元気を生む

高梁川の河川敷の玉島上成緑地では、毎週3回グラウンドゴルフの練習が行われています。その集まりに、被災後、みなし仮設住宅で生活を送っている方も参加され、玉島地区の方と一緒に練習するようになりました。声掛けから参加者が増え、なかには「みんなに会えるから」と、河川敷から遠い仮設からの参加もあります。

「被災後、自宅の片付けで疲れがどつと出たけど、またグラウンドゴルフをするようになって元気になった」と、参加者は話します。

住み慣れない環境で不安な思いを抱えている方にとって、運動によるリフレッシュだけでなく、情報を交換し合ったり、愚痴を言い合ったりすることもある、心のリフレッシュの大切な場になっています。



グラウンドゴルフは個人競技だけど、地域をつなぐチームプレーでもあります。



歌声喫茶

と楽 歌音

響け、希望の歌声

岡田分館に「青い山脈」が響き渡りました。岡田地区では3年前に歌声喫茶を立ち上げ、毎月実施していましたが、豪雨の被害でメンバーの多くは被災し、会場となる分館や機材も壊れ、活動ができないう状況になっていました。

発災から2ヶ月後、これまで歌に元気をもらってきたメンバーから、徐々に「こんな時だからこそ集まろう」という再開を望む声が高まりました。限られた準備期間のなか、みんなで一から作り直した会場には、100人以上の住民が集まりました。

いつも歌声喫茶の1曲目で合唱する「お約束の歌」を歌い、みんなで一緒に前を向きました。



1曲目の「青い山脈」が始まると、一気に会場の熱気が上がります。



下にある歌詞を見るより、「前を向いて歌おう」と声をかけ合いました。



imim (イムイム)

赤と白が織り成す、「心の復興」

イメージカラーが赤のkoheiと白のkenの男性デュオimim。これまでは神奈川県を拠点に活動し、赤と白の衣装のとおりに紅白歌合戦出場を大きな目標に掲げて日々努力を重ねています。

8月から真備町でボランティア活動に携わりながら、避難所や地域のイベントに数多く出演。

「復興アーティスト」として地域の住民と心を通わせながら、歌に元気と地域愛をのせて発信中です。

二人の手柄や、心を揺さぶる歌唱力とメッセージに惹かれ、現在真備町を中心に、imimファンが急増しています。サロンでのミニコンサート等で地域の居場所づくりを力強くバックアップしてくれています。



赤のkohei(左)と白のken(右) 歌と笑顔でみんなを元気にしてくれます。



12月に開催した単独ライブでは、地域の方がimimうちわを作って参加者に配るほどの人気ぶり。





オレンジボランティア

傾聴

オレンジは寄り添いの色

災害により、住環境や暮らしのリズムが大きく変化することで、心配されるのが認知機能の低下や地域での孤立化です。

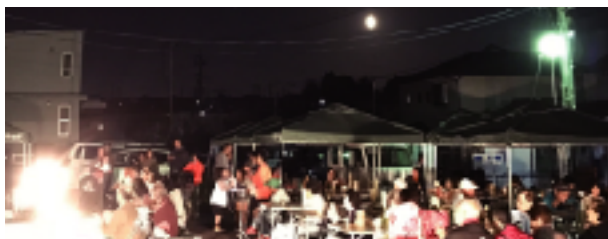
オレンジボランティアは、避難所等を訪問し、一人ひとりに寄り添いながら傾聴や談笑を行うボランティアグループで、認知症の理解と支援のイメージカラーであるオレンジの服やリングを身につけて活動します。

10月には、オレンジ色の満月と竹灯籠の灯りに照らされて、みんなで一緒に交流する「オレンジの集い」も開催しました。



避難所での認知症の方の対応や予防について、講座を行いました。

市外・県外からも、たくさんのボランティアさんが活動にきてくれました。



オレンジの集いの様子。普段なかなか外出できない方もボランティアが送迎や会場での見守り等を支援しました。



写真洗浄ボランティア

写真洗浄

思い出を守りながら、未来へ進む

「今までは、暮らしていくのが精いっぱい、とても写真のことまで手が回りませんでした。これだけ時間が経ってしまったから、もう手遅れだと思っていたけど捨てることができないんです。」写真洗浄の依頼に来た女性には涙を浮かべてそう話し、まだ写真の救出が可能であることを知ると、安堵の涙をこぼされました。

かけがえのない思い出をできるかぎり、元の場所へお返しするため、写真洗浄ボランティアチームによる「写真洗浄会」は災害ボランティアセンター等で開催されています。

体力、年齢を問わず、みんなが担い手となれるこのボランティア活動は、住民やボランティア同士が作業を通じて交流したり、作業をしながら同じ目的や達成感を共有することができ、新たな支え合いの地域づくりの一助になると期待しています。



地域に出向いて写真の洗浄方法を学ぶ「出張写真洗浄会」も各地区で開催しています。



そーる訪問看護ステーション

そーる訪問看護ステーションは事務所が被災した後トレーラーハウスを支援団体の協力のもと設置し、そこで地域の方が集い、交流できる拠点づくりを進めました。

全国から寄せられた支援物資を置き、支援や情報が届きにくい在宅生活者との心と情報を通わせながらニーズの把握や寄り添い支援を展開しました。



トレーラーハウスで地域支援

ぶどうの家ランチ

うの家。10月には、真備町辻田にぶどうの家ランチを開所しました。

支援物資の提供や、浴室の開放、炊き出しや音楽イベント、復興に向けた勉強会等ぶどうの家は、利用者さんの生活の場であると同時に地域みんなのつながりの場となっています。



事業所による地域支援

利用者も事業所も地域とともに

長く地域活動を進めてきたぶどうの家。



真備連絡会

真備連絡会が中心となって開催してきた、「地ビールと音楽の夕べ」は8月に再開し、以降は地域住民の心が通う場所として毎月第3土曜日に定期開催しています。

これまでも定期的に集まり、情報交流やイベントの企画・実施をしてきましたが、発災後は一層の連携を強化するべく、多くの職種が、それぞれの所属でできること、連携によって広がることを検討し続けています。

多職種連携

多職種のつながりから生まれた「お互いさま」

真備連絡会は、真備町の高齢者・障がい者・児童関係事業所等でつくられた、顔が見える関係と連携づくりを目的として組織された連絡会です。



「地ビールと音楽の夕べ」は12月から「まちコン」と名前を変えました。

お互いさまセンターまび



お互いさまセンターまびの開所式では、移動支援を担うスタッフへ運転者講習を行いました。

真備連絡会の協議から、11月には「お互いさまセンターまび」が開設しました。

困りごとをお互いに助け合い、誰もが町の一員として暮らし続けていけるよう「お互いさま復興」を目指し、NPO法人岡山マインドを事務局に真備連絡会の有志によって運営されています。

暮らしのなかでちょっとした支援が必要な方の電話相談に応じたり、交流会の開催、移動支援、掃除・買い物・入浴などの生活支援を行います。



災害支援ネットワークおかやま@くらしき会議

多機関 連携

それぞれが今取り組んでいることや地域の声や課題、連携を通じてできることをみんなで練り合わせる作戦会議の場になっています。

倉敷市災害ボランティアセンターの立ち上げから、毎週定期的に開催している連絡会が「災害支援ネットワークおかやま@くらしき会議」です。毎週火曜日の夕方から被災地の支援を行っているたくさんの支援者が集まります。



和やかに、熱く、連絡会は毎週開催しています。

定例の会議が終わっても、熱意のこもった協議やそれぞれが思い描いた夢の語りで二次会、三次会が続きます。
この場所ので出会った人たちができたチームもあります。
「被災地を支えたい」という強く優しい思いが集うこの場所から復興に向けた取り組みが生まれています。

まび再生ベース竹燈
(たけあかり)。
災害ネットワークおかやまのメンバーによって構成されたチーム。
ボランティア派遣やイベント開催、技術講習会等を幅広く行います。



災害の恐ろしさも 助けを求める地域の声も

同じ目的を持った仲間との連携のチカラも知った



倉敷市災害ボランティアセンター



一日のボランティア参加者数が1000人を超える日もありました。

平成30年7月豪雨により、真備地区では大規模な浸水被害、水島地区のコスモタウン広江団地では土砂災害など、倉敷市でかつてない甚大な被害が発生したことを受けて、倉敷市社会福祉協議会では、7月11日、倉敷市災害ボランティアセンターを玉島長尾に立ち上げました。

10月25日に真備町川辺に、ボランティアセンターを移転しました。移転後は、スタッフが地域を歩き、訪問によるニーズ調査を行うなど、地域に寄り添った支援に力を入れました。



ボランティアさんへ感謝のメッセージ



ボランティア活動の前線基地、サテライトの様子



倉敷市真備支え合いセンター



支え合いセンターの職員が皆さまのお宅にお伺いします。

この事業の活動拠点として真備支所に「倉敷市真備支え合いセンター」を開所しています。
「これからの暮らしが不安」「もっと情報がほしい」「地域で交流したい」等あなたの声を聞かせてください。

見守り支援

あなたの声を聞かせてください

倉敷市では、仮設住宅等に入居されている方が、引き続き地域のつながりのなかで、豊かで、安全・安心な生活を送ることができるよう、仮設住宅での生活を終えたあとも、真備町での生活に戻れることができるように「被災者見守り・相談支援等事業」を実施しています。

○倉敷市真備支え合いセンター

倉敷市真備町箭田1141-1（真備支所2階）
TEL 086-698-5115

○倉敷市健康長寿課被災者見守り支援室

倉敷市西中新田640番地
TEL 086-426-3380



高齢者支援センター（地域包括支援センター）

地域を知り地域とあるく支援センター

倉敷市では、介護・保健・医療・福祉に関する総合的な支援を行う拠点として各地区に高齢者支援センターを設置しています。

これまでも、地域の課題解決に向けて住民と一緒に協議し、寄り添い支援を続けてきました。

発災後、真備地区を担当する支援センターはすぐに地域に飛び出し、被災状況や要援護者・支援者の情報収集に走り、他の地区の高齢者支援センターもその動きをサポートしつつ、避難所支援やイベントの開催、訪問調査等被災者へ寄り添い続けています。

これからの復興の鍵を握る地域の大切なパートナーです。

高齢者支援センターからのお願い

『最近引越してきた方』
『地域から孤立しているかもしれない方』

など、皆さんの周りに、ちょっと気になる高齢者は居ませんか？

平成30年7月豪雨災害では、高齢者を主な、被害に及べた方が多く見られました。

被災後、多くの方が仮設住宅に生活を始めています。でも皆さんの周りに、被災して引越してきた方も多くいらっしゃいます。高齢者支援センターに、ぜひご連絡ください。

全ての皆様が住みやすい地域にするため、ご協力、よろしくお願い申し上げます。

市内の高齢者支援センターが協働して作成したチラシ。
慣れない地域で不安になったり、孤立している被災者がいたら、高齢者支援センターまでご一報ください。



大高地区では、みなし仮設住宅に住む住民を対象に、交流会を開催し、あたたかい時間を共有しました。



地域の課題と強みを共有する場「小地域ケア会議」も高齢者支援センターの尽力で、地域の倉庫で復活しました。